

令和7年度「六甲山森林整備戦略」森林整備に関する研究会 議事要旨

開催日時 令和8年3月5日(木) 15時00分～17時00分

開催場所 神戸市役所4号館1階本部員会議室+オンライン

1. テーマ別調査

(1) 市街地に近接した森林の低林管理について【祇園山】

- ・市街地の背後に存在する森林の管理手法を検討するため、斜面对策工事で伐採が実施された場所で追跡調査を実施した。
 - ・伐採後に2-3年が経過した場所では、アカメガシワやカラスザンショウなどの先駆性樹種が繁茂し、地表が被覆されている状況が確認された。
- ・樹木の引き倒し試験の結果によると、先駆性樹種であるアカメガシワの根系の支持力はヒノキと同程度である。今回の調査の結果では、ほかの樹種の定着が見られないので、これら先駆性樹種の根系による効果も評価できないか。樹木に対してどの程度の効果が期待できるか、検討が必要である。
- ・災害の危険度が高い場所であるため、樹木を触るよりも斜面对策を優先すべきである。

(2) 森林植生に対するイノシシの影響とその対策について【再度ドライブウェイ】

- ・イノシシによる林床植生への影響を把握するため、侵入防止柵を設置し、柵内外における植生や表層土壌の侵食状況を調査した。
 - ・過年度の調査結果と同様に、柵外ではイノシシによる掘り返しによって土壌の攪乱や植生の破壊が認められたのに対し、柵内では植被率やリター被覆率の増加が認められた。ただし、一部の地点では、柵の設置後の植生回復が緩やかであった。
- ・柵の設置により一定の効果が出ているが、植生の変化も含めてトータルで評価する必要がある。
- ・イノシシの出現状況の把握にはセンサーカメラも有用である。
- ・表層土壌が侵食を受けている場所では、種子(埋土種子)も流されて植生が回復しない。播種による植生復元も考えられる。

(3) アカマツ半自然林の整備について【五助横池線】

- ・過年度に森林整備を実施したアカマツ林において、追跡調査を実施した。
 - ・照葉樹(常緑樹)が繁茂していた場所では、カラスザンショウなどの先駆性樹種の定着が認められ、林床にミヤコザサが生育していた場所ではミヤコザサの被度増加などが確認された。
- ・アカマツ林として維持できないとなった場合に、次善の策として先駆性樹種の優占林を

目標とすることも考えられる。

- ・コナラを含めた夏緑樹の高木林を目標として、照葉樹(常緑樹)の除伐は実施しながら、カラスザンショウなどについては自然の遷移に任せてよいのではないか。
- ・林床にミヤコザサが優占する場所では、樹木を伐採してミヤコザサ草原にすることも考えられる。地表面を保護でき、景観(見晴らし)も改善する。
- ・拠点施設の周辺であれば、かつて六甲山全体を覆っていたアカマツ林を復元する方針の整備も考えられる。

(4) 照葉人工林の小面積皆伐による更新【二本松林道】

- ・植林に由来するシラカシ等の単調な林相を改善するため、10m×10m 程度の範囲を伐採し、追跡調査を実施した。
- ・伐採後の再生状況は場所により様々であったが、ネザサの増加による林床植生の増加が確認された。

- ・夏緑樹(落葉樹)の定着を目指すなら皆伐面積は100㎡では小さく、15m×15m(225㎡)程度の規模が必要である。
- ・自然状態での樹木の定着が期待できない場合は、補植や播種も必要。照葉樹(常緑樹)を導入すると林床が暗くなるため、夏緑樹(落葉樹)を選択した方がよい。照葉樹であっても、マンリョウなどの矮性低木ならよい。
- ・植樹や播種を行う場合には、遺伝的攪乱を防止するため、六甲山の種子や表土を撒くのが望ましい。
- ・ネザサの増加は表面侵食の防止効果があるが、他の種の侵入が遅くなること、マダニがつきやすくなることなどの懸念点もあるので注意が必要である。

(5) ナラ枯れ被害を受けた夏緑半自然林の小面積皆伐による更新(菊水山)

- ・ナラ枯れによる枯死木が目立つ道路沿いにおいて、小面積の皆伐を実施し、伐採後1年目の調査を実施した。

- ・コバノミツバツツジの高密度での植栽を検討しているとのことであるが、低木林管理が非常に重要である。
- ・一般の方にもわかるように、低林と低木林の違いを説明する必要がある。

2. 新規整備エリアの整備方針

- ・列状間伐を実施し、光環境が改善されたときにどのような種が出てくるか予測しながら整備を行うことが重要である。
- ・イロハモミジの間伐を予定している箇所では、表層土壌が動いているということなので、植生回復が進まない可能性がある。植生回復を促すために、間伐以外の手法(土留

め等)も検討する必要がある。

- ・マテバシイ林の整備は、列状間伐としているが、実態としては小面積皆伐ではないか。

3. 六甲山森林整備戦略の改定について（報告）

- ・研究会の情報量がすごく大きくなる。コンパクトにすることは大切だが、高度な内容が多いので内容を検討する必要がある。
- ・戦略にも専門用語があるが、概要などをわかりやすく示す必要がある。施策の概略を作る、研究内容を比較するなどして、一般の人に示す時期にきている。
- ・一般との情報格差がある。立場の違う委員が参加することで解決していくのではないか。内容をすぐに理解しづらい部分があるので、ターゲットごとにわかりやすく伝えることが重要である。
- ・施策として、どの地域でどんなことをしているか、どうつながっているかを示すことも重要である。
- ・42年災害以降、50年ほど経過しているが、大きな災害は起こっていない。その間、樹木は非常に大きくなっている。森林の現存量は当時の倍以上になっている。いつか大きな災害が来るかもしれない。そういった事態に対応することがこの研究会の当初の目的だったと考える。
- ・半自然林という用語は専門家でもあまり使わないが、戦略の中では正しく表現されている。一般の方にはなじみのない専門用語があるが、わかりやすい表現が必要と思う。
- ・整備を進めていこうとすると維持管理が必要となるが、そのひとつに資源循環がある。戦略に記載されている年間300m³は整備面積300haに対して小さいので、全体の考え方もまとめておいた方がよい。
- ・地域の実態に応じて整備を進めるために、エリアの設定を防災・減災優先エリアと整備・循環促進エリアに分けたが、生き物についての配慮も検討する必要がある。